

三遊亭円朝の中国俗語趣味*

羅工洙**
gsna@ynu.ac.kr

〈目次〉

- | | |
|-----------------|---------------------|
| 1. はじめに | 6. 話題転換語・構造助詞「～地」 |
| 2. 先行研究と研究方法 | 7. 「ほんとう」を表わす「真個」など |
| 3. 章回の回目と結びの常套句 | 8. 一伍一什・比況の「～と一般」 |
| 4. 指示・疑問代名詞 | 9. その他 |
| 5. 人称・呼称 | 10. おわりに |

主題語: 三遊亭円朝(Sanyute Encho)、落語(Rakugo)、話し言葉(Spoken Language)、中国俗語(Chinese Slang)、漢字表記(Chinese Character Notation)

1. はじめに

三遊亭円朝(1839-1900)は、幕末-明治期に活躍した落語家として有名である。落語家ではあるが、彼の落語は文字化され、幕末から明治期に至るまでの大勢の人々に広く読まれていた。

円朝の作品には、当時の話し言葉の様子も籠められているので、幕末から明治期に至るまでの話し言葉の世界を知る資料にもなる。しかし、円朝の作品には多様な漢字表記が見られるが、そこには現代日本語には見られない漢字表記も多数ある。筆者は、明治期から昭和前期に活躍した作家の作品に見られる中国俗語の使用問題について考察しているが、今回は、円朝の作品を通して中国俗語使用の状況を把握しようと思う。

では、三遊亭円朝はどういう人物なのか、『日本人名大事典』(3)¹⁾に円朝の紹介があるので、これを簡単に纏めて紹介しよう。

* 本研究は韓国研究財団2018年度中堅研究支援事業(2018S1A5A2A01029485)の3次年度(220C000638)により作成された。

** 嶺南大学校 日語日文学科 教授

1) 日本人名大事典(1990)、平凡社、p.208

近世の名人。本名出淵次郎吉、天保十年四月、江戸に生る。祖父は前田備後守に仕へたが、父長蔵侍を嫌ひて退身し、二代目圓生の門弟となり、橋屋圓太郎と稱す。幼年、國芳門に入り浮世絵を学びたるも、見やう見真似の落語に巧みなるところから、父に従ひて圓生の門に出入する中、七歳の。小円太の名乗りを貰ひ、江戸橋土手倉の寄席に出たるを初出演とする。のち狂言亭ゑん玉に伴はれて諸所の席を廻り、十七歳の時、場末の真打になり円朝と改む。その頃の彼は三扇の定紋つきたる黒羽二重の衣裳に、白博多若しくはお納戸献上の帯、緋縮緬の襦袢の袖をちらめかし、若衆俳優のごとく薄化粧などしたる艶めかしき容姿にて、まづ婦女子の人氣を得、次第に芝居嚙を工夫し、当時の人気俳優の仮声をよくし、話こみ語り来つてパツと後幕を切つて落せば、灯入りの遠見などよろしく話中の情景を展開し、それを背景に語り進むといふ、厭味もあれど才気ほとばしり、かつ、話中の人物を百人百様に活躍せしむることに勝れたため、ますます人氣をあぐるに至り、創作の才又幾多の新作を講演して非凡を稱せらる。年と共に技芸益々円熟し、名声高く、門下に三代目円生、円馬、焉橋、焉喬の四天王を初め、二代目円遊、四代目円生、円左、萬橋、ラッパの円太郎、声色の金朝ら、優秀なる落語家を輩出し、三遊派は頃に興隆の威を張り、更に円朝は、服地桜痴、篠野採菊等の知遇助力を得て話術を研ぎ、泰西名著の翻案物に志し、遂にサッカーのトスカを完講し『名人鏡』として伝ふるに至る。彼の自作自演として伝らるる名作には、真景累ヶ淵、荻江の一節、安中草三、塩原多助、怪談乳房榎、忍岡義賊隠家、鶴殺し嫉妬庖刀、鏡池操松影、業平文治、粟田口鑑定折紙、怪異談牡丹灯籠その他があり、わけても牡丹灯籠は講演落語速記の濫觴として、明治十七年速記者若林珪蔵の筆記完了、十八年二月公刊された。明治二十二年三月、三遊派繁栄の記念、祖、初代円生のために追福を営み、三遊塚を築く。明治三十三年八月歿、年六十二。

(p.208、藤沢執筆)

円朝は父の職業を継がず、幼少の時から講談師の円生の門下となる。事実上生れながらの講談師として成長していたということになる。7歳から講演をし始め、17歳に円朝と名乗る。以後、大人気の講談師として名声を博していた。特異な点は、人の作品を講演するより自作の講演が多く、また作品も多数残していることである。進藤咲子によれば、円朝は仏教の「禪」²⁾に関心を寄せていたというが、『日本人名大事典』には言及が見られない。進藤によれば、明治5年から話術だけによる素嚙に転じたという。つまり、円朝の作品は速記により作成され、後に作品として刊行されるようになったのである。山本政秀は、「明治十八年十一月一日日本傍聴筆記学会前橋支会に於て述べ 源綱紀演述・橋倉次雄筆記」の「速記法の効用」について、「第一 筆記文を翻訳するにはなる丈けことば通りにする事、第二 言葉通りに翻訳すること、第三 言葉通りに翻訳する効用」の三点を挙げた上で、「このよう

2) 進藤咲子(1982)「三遊亭円朝の語彙—『怪談牡丹灯籠』」『講座日本語の語彙』明治書院、p.127

に、速記字で書き取ったものの訳文にあたっては、演術者の言葉通り俗語のままの文章にすることが極めて大切なこと³⁾と述べている。山本政秀の意見を紹介している「速記法の効用」については、『塩原多助一代記』『英国孝子之伝』に若林珣藏の記がある。「傍聴筆記法」は、『鏡ヶ池操松影』『安中草三伝後開榛の梅が香』に見られる。

円朝の作品の中国俗文学との関わりを知る指標が、『怪談牡丹灯籠』の速記者である若林珣藏の「序詞」⁴⁾に見られる。

「嘗て稗史小説の予約出版を業とする東京稗史出版社の社員来て曰く有名なる落語家
 三遊亭円朝子の人情話は頗る世態を穿ち喜怒哀楽能く人をして感動せしむること恰も其現況
 に接する如く非常の快楽を覚ゆるものなれば~即ち此怪談牡丹灯籠なり 是は有名なる支那
 の小説より翻案せし新奇の怪談にして 頗る興あるのみか勸懲に裨益ある物語にて~」(『円朝
 全集』1、p.3 若林珣藏執筆)「原来落語なるを以て、小説稗史に比較なば、所謂雪と炭俵。」『塩
 原多助一代記「序詞」』(『円朝全集』1、p.269 三遊亭円朝執筆)

「序詞」は、前期作品(『円朝全集』第2巻まで)に記されているが、以後は「序詞」なしに直ぐ話が始まっている。後に、『雨夜の引窓』(『円朝全集』第9巻)に著作した契機を「序」の形で示しているが、他の作品には見られない。

円朝の落語は、口演を速記して文字化しているが、問題は難しい漢字表記が含まれていることである。山本政秀は、『怪談牡丹灯籠』の出版と関連して、「円朝の口演の全語をすっかりそのままに書き取り得たのではなく、幾らかの書きもらしや書きちがいが想像される。しかし八分通りは口演のままを文章にできたものと思われる。そして「報知新聞」記者某氏の添削というのは、主として漢字の用い方(俗語などに宛てた)と『里見八犬伝』などの読本の体裁にならって、各回の初めに付けた漢文流の見出し文あたりではあるまいか⁵⁾と述べている。つまり、口述のものであるが、文字化した文章は馬琴の読本の体裁になっているし、漢字の使用もそれに似ているとしているのである。馬琴の読本には中国俗語が多数含まれているので、そのような意見が出たと思われる。円朝の落語を速記法で文字起し

3) 山本政秀(1993)「速記出版物の言文一致促進」『近代文体発生の史的研究』岩波書店、pp.367-368

4) 『怪談牡丹灯籠』の「序詞」は、岩波書店の『円朝全集1』(2012年)のものを使用した。

5) 山本政秀(1993)の上掲書、p.370

した人は、若林珮蔵・酒井昇造・小相英太郎・石原明倫・まつ永魁南・今村次郎・速記者社員⁶⁾・社員速記⁷⁾・『蝦夷訛』(『円朝全集』第11巻)は三遊亭円朝の作になっている。第13巻には、速記者不記のケースもある。問題は、作品に現われる漢字表記が誰によるものなのかが不明な点である。たとえば、中国俗語と関連している表記については、出版社が稗史小説を刊行しているの、出版社も関与している可能性もある。一方、清水康行は『牡丹灯籠』を考察した上で、「本書の表記の責任を・原作・講演者たる円朝に負わすことはできない⁸⁾と述べ、九編附録の「広告」の例を挙げている。

このしよもと ゑんてうし ゆるし へ かきしる
此書素より円朝子の承諾を得て筆記せしものなれども子の繁忙きと出版を取急ぎたるとに依
り原稿の校閲を子に請ふの暇なく草卒に印刷に附したれば往々不完全の歎を免れざるにあり
よつ たい べん いちいちし こうまつ へけふがふ ち みつ
依て第十編よりは一々子の校閲を経校合を緻密にし(p.76)

この記事に限っていえば、円朝は関与していないように見えると清水は指摘している。速記者の判断により文字起しをしていると思われるが、山本政秀の指摘のように、『報知新聞』の某氏、外に出版社や円朝も関与していると思われる。円朝の作品には、中国俗文学を読んだ様子は殆んど見られない。

ナニイ、韓信が股ア潜るし『菊模様皿山奇談』明治26年7月、円朝全集9、p.170)

ここではだれが中国俗語を使用していたのかは問題にせず、専ら作品の分析を通して、中国俗語の使用状況を把握することにする。

調査の対象は、2012年に岩波書店より刊行されている『円朝全集』(全13巻、別巻2)である。作品の数も多く、作品の大部分が長編であるので、資料としてふさわしい。対象となる作品を示すと次の通りである。

『怪談牡丹灯籠』若林珮蔵筆記、明治17年7月、円朝全集1

『塩原多助一代記』若林珮蔵筆記、明治17年12月、円朝全集1

6) 速記者名はない。

7) 速記者名はない。

8) 清水康行(1988)『『牡丹灯籠』の漢字』『漢字講座9近代文学と漢字』明治書院、p.76

- 『鏡ヶ池操松影』若林珪蔵筆記、明治18-22年、円朝全集1
『英国孝子ジョージスミス之傳』若林珪蔵筆記、伊藤新太郎助筆、明治18年4月、円朝全集2
『後開榛名の梅が香』酒井昇造筆記、明治18-19年、円朝全集2
『業平文治漂流奇談第一編』若林珪蔵筆記、酒井昇造助筆、明治18年11月、円朝全集3
『松の操美人の生理』小相英太郎速記、明治19年10月、円朝全集3
『蝦夷錦古郷の家土産』小相英太郎速記、明治19年12月、円朝全集3
『欧州小説黄薔薇』石原明倫筆記、明治21年1月、円朝全集4
『鶴殺疾庖刀』小相英太郎速記、明治20年1月、円朝全集4
『月に謡荻江の一節』小相英太郎筆記、明治20年3月、円朝全集4
『敵討札所の靈験』小相英太郎筆記、明治20年6月、円朝全集5
『真景累が淵』小相英太郎筆記、明治20年9月、円朝全集5
『怪談乳房榎』まつ永魁南開書、明治20年12月、円朝全集6
『緑林門松竹』小相英太郎筆記、明治21年1月、円朝全集6
『操競女学校』酒井昇造速記、明治21年4月、円朝全集6
『栗田口霽笛竹』酒井昇造速記、明治21年6月、円朝全集7
『文七元結』酒井昇造速記、明治22年4月、円朝全集7
『福祿寿』酒井昇造速記、明治22年5月、円朝全集7
『熱海土産温泉利書』酒井昇造速記、明治22年5月、円朝全集8
『霧隠伊香保湯煙』酒井昇造速記、明治22年7月、円朝全集8
『松と藤芸妓の替紋』酒井昇造速記、明治22年10月、円朝全集8
『荻の若葉』酒井昇造速記、明治23年2月、円朝全集9
『雨夜の引窓』今村次郎速記、酒井昇造速記、明治23年4月、円朝全集9
『菊模様皿山奇談』酒井昇造速記、明治26年7月、円朝全集9
『名人競』酒井昇造速記、明治24年7月、円朝全集10
『八景隅田川』酒井昇造筆記、明治25年1月、円朝全集10
『政談月の鏡』酒井昇造速記、明治25年3月、円朝全集10
『名人長二』三遊亭円朝作述、明治28年4月、円朝全集10
『蝦夷訛』谷文晁の伝作、明治26年11月、円朝全集11
『雨後の残月』酒井昇造速記、明治30年9月、円朝全集11
『応文一雅伝』酒井昇造速記、明治30年10月、円朝全集11
『離魂病』速記者酒井昇造、明治30年12月、円朝全集11
『火中の蓮華』速記者社員速記、明治30年11月、円朝全集12
『谷文晁の伝』酒井昇造速記、明治31年1月、円朝全集12
『闇夜の梅』酒井昇造速記、明治31年1月、円朝全集12

『奴勝山』三遊亭円朝口演、明治33年7月、円朝全集12

『塩原多助後日譚』三遊亭円朝遺稿、明治33年11月、円朝全集12

『怪談阿三の森』無、大正2年、円朝全集12

『心中時雨傘』無、大正居2年、円朝全集12

全集本は別巻まで入れて全15巻であるが、12巻までの資料を対象とし、以後は短篇が多いので参考(円朝全集別巻1)にすることと定める。作品の大部分は、酒井昇造の速記によるものであることが分かる。

2. 先行研究と研究方法

二葉亭四迷が言文一致の成立に円朝の影響を受けたという話は有名である。「余が言文一致の由来」(明治39年5月)でその内容を簡単に見ると、「坪内先生の許へ行つて、何うしたらよからうかと話して見ると、君は円朝の落語を知つてみやう、あの円朝の落語通りに書いて見たら何うかといふ」⁹⁾とある。つまり、円朝の落語が後の言文一致体の誕生に寄与していたのである。

進藤咲子は「三遊亭円朝の語彙」という題で円朝の語彙を考察しているが、中でも『怪談牡丹灯籠』のみを対象としている。ここでは、江戸語と近世中国語との関連語を取りだし、例を一つずつ出している。近世中国語との関連の語としては、「渠・誘・お饒舌・穩婆・連累・二価・標致・國色・不快く・潛然・同伴・権解・白眼む・撲地と・閃々・喫驚・踉跄々々と・真正・真個・俊燈」¹⁰⁾を一例ずつ紹介している。『怪談牡丹灯籠』のみの例ではあるが、三遊亭円朝の作品に中国俗語が用いられていたことを指摘した点で重要な指摘である。清水康行は『牡丹灯籠』における漢字を考察しているが、進藤が提示した中国俗語を振り返り「却説・後回・一伍一什」の例を追加して、「本書のような大衆文藝・稗史小説のあて字の出自として、近世中国語からの影響を整理することが、有効な視座として望まれ

9) 川田順造(2013)「ハナシと文字のあいだ」『円朝全集』第2巻の月報2、p.3にも紹介がある。山本政秀(1993)の上掲書、p.381にもある。

10) 進藤咲子(1982) 前掲論文、pp.143-146

て考察した結果、近世や近代の日本文学にも援用されていることを明らかにしたことがある。では、円朝における章回の「回目」と「結びの常套句」を見てみよう。

- 第老回 けうかんていすあいどわ そうたうを
 凶漢泥酔挑 = 争闘 -
- そう しふんどしてかほす くわんを
 壮士憤怒釀 = 禍本 - (『怪談牡丹灯籠』円朝全集1、p.5)(第十三編二十一回の下)
- 第二回 けいもんにいん ふらいほむにすか せいを
 閨門淫婦擅 = 家政 -
- べつさうにか じん しなふ さいしを
 別業佳人恋 = 才子 - (『怪談牡丹灯籠』円朝全集1、p.10)
- 第一回 さんぞんしゆじう きぐうをかたる
 山村主従語 = 奇遇 -
- ちうぼくくしん そちみをあやうふす
 忠僕苦心危 = 其身 - (『塩原多助一代記』円朝全集1、p.180)(第十八編十八回)
- 第一回 らくはくのきようかんをひやし しょうねん
 落泊凶漢脅 = 少年 -
- じぜんのごうしょうすくう できどうを
 慈善豪商救 = 溺童 - (『鏡ヶ池操松影』円朝全集1、p.391)(第五編十五回)
- 第一回 さんぜんのわうごんきくわを まねぐ
 三千黄金招 = 奇禍 -
- いつべんのしやうしよこうなんをかます
 一片証書釀 = 後難 - (『英国孝子ジョージスミス之傳』円朝全集2、p.7)(第八編八回)
- 第一回 さう し ぎ しんたすく かうしを
 壮士義心助 = 孝子 -
- えうどうとんさいひしぐ きやうかんを
 幼童頓才挫 = 凶漢 - (『後開榛名の梅が香』円朝全集2、p.93)(第十一編十四回)(百二十九)
- 第一回 きやうかくなんを こんどうに すくふ
 俠客救 = 難於混堂 -
- きやうじくを らうたくに うつたう
 凶兒訴 = 苦于浪宅 - (『業平文治漂流奇談』円朝全集3、p.5)(第九編九回)(第十回～第十七回)

円朝の多くの作品のうち、7作品に「回目」が現われている。中国俗文学では「七言」または「八言」の形が多いが、円朝の作品は総て七言絶句の形式になっていて、よほどの知識がないと少々難しい内容である。但し、振り仮名により意味内容が分かるようになってはいる。全体的に見ると、「章回」のうち「章」はなく「回」として展開されている。中国俗文学では「章」より「回」の方が多く、その影響なのか円朝の作品でも「回」で表わしている。「回」は

下位に属し、もっと大きな体裁は「編」である。つまり、「編一回」の構成で、例えば『牡丹灯籠』の場合、「第壹編 第壹回」になっている。全体的な構成は、例文の最後に示したように「第十三編二十一回の下」等である。『牡丹灯籠』では、唯一「第一回」の代わりに「第壹回」となっているが、他の作品では「第一回」である。このような中国俗文学の典型ともいえるべき「回目」は『円朝全集』の早い時期に集中していて、『業平文治漂流奇談第一編』以後は皆無である。なお、上に示したように、作品ごとに少々異なる構成になっていることが分かる。「編」と「回」が一致しているものもあれば、不一致のものもある。『後開榛名の梅が香』の場合、「第十一編十四回」以降、只の数字のみで「一」から「百二十九」の体裁に変っているし、絶句もない。『業平文治漂流奇談』の七言絶句が主流だが、八言絶句も混ざっている。さらに、「第九編九回」まではこの体裁で、「十回」からは「編」を用いていない。以後は「第一回・第一席・(一)」のような形で、七言絶句は見られない。ともあれ、講談の作品であるにも関わらず、中国俗文学の体裁を取っていたことは特異な点であろう。尾崎紅葉の場合には「回目」が見られない。坪内逍遙の場合は、『泰西活劇春窓綺話』(明治13年)には「第壹回、七言絶句」(明治13年)、『春風情話』(第壹套、八言絶句)(明治13年)には小説や劇で用いられる形が見られるが、やはり初期作品に集中している。筆者は、坪内の中国俗語使用を考察する際、この問題について述べていない。

次は、「結びの常套句」についてみよう。「畢竟・且聴下回分解」は、「章」や「回」の最後にくる中国俗文学の常套句であると述べた。近世や近代の文学にはこのような体裁も見られるが、かなり変形した形も数多く見られる。新しく始めた話の内容は一応ここまでにしておき次の話は次回に述べるから、また聞いてくれといった形式である。近世の日本人作白話小説や近代の漢文小説には「畢竟・且聴下回分解」の結びが見られるが、円朝の作品にはどのように現われているのだろうか。

根津の清水の花壇より海音如来の像を掘出す処から悪事露頭の一埒は次回まで御預りに致
 しませう(『怪談牡丹灯籠』円朝全集1、p.132)。

さてこのあとどう
 扱此落着は如何なりますか何れ後會『怪談牡丹灯籠』円朝全集1、p.32)。

～是から如何相成りますか後會に申上ます(『塩原多助一代記』p.193)

お話しは次回に申上ませう(『塩原多助一代記』p.208)

次編に委しく申上ませう(『英国孝子ジョージスミス之傳』p.53)

死骸しがいの始末しまつから遂ついに悪事あくじろ露頭けんに及ぶところは次つぎに御聞おききにいれます升ます(『鏡ヶ池操松影』p.497)

次つぎに申上まへ升ます(『後開榛名の梅が香』p.123)

此跡このあとはどう相成あひなりませうか 次回みとうばん申上まへます (『業平文治漂流奇談』p.19)

御奉行お ぶぎやうと論ろんをいすると云いふお話しはなしでありますが次回つぎにたつぷり演のべませう(『業平文治漂流奇談』p.91)

いよいよといふおきせの返事へんじは次回みやうにち申上あへ升あへふ(『怪談乳房榎』p.26)

看官かんくわん幸さいに筆記ひっきの疎漏そろうを尤とがむること勿なかれ(『鏡ヶ池操松影』p.476)1例。看官かんかん『英国孝子ジョージスミス之傳』1例。

円朝の作品における結びの常套句は、「章回」や「回目」に比べ、まともな受入れの形ではない。「次回・後回・後会・次回・次回・次回・次編・次・看官」といった形をとって、次にも話が展開するという予告的な話をしている。これらの表現も「章回」の形式をとっている作品にのみ現われていて、他の作品には用いられていない。また、「回」が終るたびにこのような結びをするのではなく、疎らにしか現われていない。円朝のような「結びの常套句」は、明治10年代の文学作品に多く現われるのが特徴である。

4. 指示・疑問代名詞

指示代名詞や疑問代名詞は、近世や近代の文学作品に多様な中国俗語が現われている。中国においても指示や疑問の代名詞は基本的な語であるので中国俗文学では多用されているが、日本の文学作品にも多用されていた。中国俗文学には「這～・那～」を使用する指示代名詞、「怎～・什麼・甚麼」を使用する疑問代名詞がある。唐話辞書である『俗語解』には

這 此ト云字ナリ陶甕日本音言ナリ者ノ音ハ後世ノ俗音ナレトモ此ノ字ノ心ニ使フ寸ハ者ノ音ナリ。

那 晃曰彼ノ字其ノ字ノ心ナリ何レト用ル時ハ上声ニナルナリ。

甚麼 一作什麼ニ類云由來ナリ。甚人 何人ナルヤ。

とある。『俗語解』には、「這～・那～」系の語や「怎～・恁～」系の語も多数掲載されている。このことから、中国俗文学の基本語彙として用いられている語であることが窺える。尾崎や坪内もこれらの語を多用していたが、特に、尾崎の作品には実に多様な指示・疑問代名詞が用いられていた。尾崎の例を見ると、「這箇・那箇・那一箇・那個・這樣・那樣・這麼・那麼・這裏・這裡・那裏・那裡・那里・這般・這回・這度・這辺・那邊・這些・那位・那等・恁麼・什麼・甚麼」が各々実に多様な訓を付けて用いられている。外にも「這+N・那+N」の語が多数用いられるが、坪内の場合も尾崎よりは少いがやはり多用していたことがわかった。では、三遊亭円朝の作品に見られる指示・疑問代名詞を見てみよう。

這回円朝が演じます「闇夜の梅」と題するお話は、『闇夜の梅』p.111)1例。

エエ這回突然の御依頼に依りまして一席伺ひます(『雨後の残月』p.197)1例。這度『塩原多助後日譚』6例。這度『塩原多助後日譚』17例。『八景隅田川』1例。

君那邊に居ました(『怪談牡丹灯籠』p.16)1例。那邊『塩原多助一代記』1例。那邊『蝦夷訛』1例。

那邊『蝦夷訛』1例。『八景隅田川』那邊2例。

那樣者へ付ては置んと、(『怪談牡丹灯籠』p.149)2例。

那樣な『塩原多助一代記』1例。『蝦夷訛』1例。『菊模様皿山奇談』1例。那樣に『塩原多助一代記』1

例。那樣『業平文治漂流奇談』2例。那樣に『松の操美人の生理』3例。那樣に『松の操美人の生理』

1例。『蝦夷訛』1例。那樣な『松の操美人の生理』1例。

此麼所に隠れて居るやうな訳、(『鯉沢』橋家円喬、大正14年、円朝全集別巻1、p.254)1例。

然う酌ちやア不可ません、其麼には飲めません、(『鯉沢』橋家円喬、大正14年、円朝全集別巻1、p.254)1例。

円朝作品における主たる指示代名詞は「這回・那邊・那樣」である。特に「那邊」が多用されている。しかし、尾崎や坪内に比べたら、遙かに少いといえよう。疑問代名詞の場合は、基本的に「怎地・怎麼・怎樣」とか「什麼・甚麼」が一般的な語である。しかし、円朝の場合は、中国俗語的な疑問代名詞は殆んど用いていない。俗語的痕跡として「此麼・其麼」が1例ずつ見られるのみである。それも、作者が円朝の門下生である「橋家円喬」となってい

～家」とか「兄弟姉妹」を表わす語が多い。これが、日本の近世や近代の文学にも多用されている¹⁴⁾。この人称や呼称に関する語は、やはり尾崎や坪内の作品にも多種多様な語が用いられている。尾崎の場合には、「良人・所夫・所天・阿父・阿爺・阿母・阿郎・阿兄・阿嬢・乃公・乃父・措大・朋友・各位・各自・足下・僮夫・姐・間諜・渠・支配人・自家・私窩子・東道・～漢・大哥・渾身・小生・幫間」のような例が見られる。坪内の場合は、「阿誰・阿父・阿母・阿爺・阿嬢・阿弟・阿兄・阿女・阿郎・阿娘・儂・你・渠・所天・良人・姐・大姐・～們」の外にも多様な人称・呼称が見られる。人称・呼称も、尾崎や坪内の作品に多用されている語の一つであった。円朝の場合はどうであろうか。まず、人称代名詞としては「儂・渠」が少々みられる。

それでも儂は斯うしたいの彼したいのと、(『離魂病』p.355)38例。儂p.365、1例。儂p.367、1例。

渠は飯焚の雇ひ婆さんです(『名人長二』p.413)2例。渠p.497、1例。渠か渠は室田の家に居る

婦人サ(『蝦夷訛』p.21)4例

渠を旨く欺し孝助と喧嘩をさせて置き(『怪談牡丹灯籠』p.52)6例。

それでも渠が裏家住居に馴れて誠に當節はよく馴れて居ります(『塩原多助一代記』p.187)4例

「我・他」は、現代日本語にも生き残っているので考察の対象から除外する。円朝の作品には、人称として「儂・渠」がみられる。「儂」には「わたし・わし」、「渠」には「あれ・かれ」という訓をつけている。三人称である「渠」は尾崎や坪内も多用しているが、特に坪内の場合は一・二人称の「儂・你」まで用いていて、中国俗語を活発に運用していたことがわかった。円朝も中国俗語の人称代名詞を用いているものの、あまり好んでいないことがわかる。次は呼称の語についてみよう。呼称の場合は、中国俗語をあまりにも多用しているし、対象とする作品も多いため、全例を示すことは紙幅の関係上不可能である。ここでは、語の種類とその読みを提示し、付加説明で用例の多寡を述べることにする。

★「阿母」=「阿母さん・阿母さん・阿母さん・阿母さん・阿母アさん・阿母・阿母はん・阿母

14) 奥水優(1985)『中国語の語法の話—中国語文法概論』光生館、p.219

15) 羅工洙(2017)「近世・近代における『阿～』系列の中国の呼称について」『日本近代学研究』第55輯、韓国日本近代学会、pp.7-37

羅工洙(2018)「近世・近代における中国語の接尾辞『～家』の受容と意味用法」『日本近代学研究』第55輯、韓国日本近代学会、pp.7-41

アさま・阿母さま・阿母ちやん・阿母ちやま・阿母・阿母ア・阿母ア・阿母・
 阿母様・阿母様・阿母様・阿母様・阿母様・お阿母様・お阿母様・御阿母様・阿母さん・
 阿母・阿母・阿母・阿母さん・阿母様・お阿母さん・お阿母さん・阿母さん・阿母・阿母
 さま・阿母さま・阿母様・阿母様・阿母阿母さん・阿家さま

★「阿父」=「阿父さん・阿父さま・阿父さん・阿父さま・阿父様・阿父・阿父・阿父」、「那父
 さん」

★「阿爹」=「阿爹・阿爹・阿爹さま・爹爹さん・爹爹さま」

★「阿舅」=「阿舅」

★「阿爺」=「阿爺さん・阿爺さん」

★「阿兄」=「阿兄・阿兄イ・阿兄・阿兄・阿兄さん・阿兄さん・お阿兄さん・阿兄さん・阿兄
 さん・阿兄さま・御阿兄様・御阿兄様・阿兄上様・阿兄様・阿兄様・阿兄様・阿兄・
 阿哥・阿哥・阿哥」

★「阿嬢」=「阿嬢様・阿嬢様・阿嬢様・阿嬢さん・阿嬢さん」

★「阿姐」=「阿姐さん」

★「阿奴」=「阿奴」

★「哥哥」=「哥哥・哥哥・哥哥」

★「大哥」=「大哥・大哥・大哥さん」

★「小哥」=「小哥ア・小哥ア・小哥・小哥・小哥・小哥・小哥・小哥・小哥・小哥・小哥・
 小哥・小哥・小哥・小哥・小哥ア・哥」

★「兄哥」=「兄哥・兄哥・兄哥・兄哥イ・兄哥・哥人」

★「良人」=「良人・良人・良人・良人・良人・良人・良人・良人・良人・良人・良人・良人・
 良人・良人・良人・良人・御良人・御良人・良人・良人・良人・良人・良人・良人・良人・
 良人・良人・良人さん・良夫・良夫」

- ★「所天」=^{をツと}「所天・^{ぬし}所天・^{ていしゆ}所天・^{をつと}所夫」
- ★「乃公」=^{おれ}「乃公・乃公・乃父さん・乃公・乃公・乃公等・乃公ア・乃公達・己乃・
^{おらア}乃公・^{おらツら}乃公輩・^{おらツち}乃公達・^{あなた}乃公・^{こちら}乃公」
- ★「足下」=^{そくか}「足下・^{そつか}足下・^{あなた}足下・^{あなた}足下・^{おまへ}足下・^{おめへ}足下・^{てまい}足下・^{てめへ}足下・^{われ}足下・^{あなた}足下方・
^{きさま}足下・^{おまへ}足下さん・^{おめへ}足下さま」
- ★「姐」=^{ねへ}「姐さん・^{ねえ}姐さん・^{あねご}姐御・^{あね}姐さん・^{あねご}姐子」
- ★「廝」=^{こぞう}「廝徒さん・^{こぞふ}廋丁・^{おまへ}廋役」
- ★「小～」=^{わたくし}「小可・小可・小可・小生・小生・小生・小生・小生・小生・小生・小生・小生・
^{こもの}小廝・^{ボーイ}小廝・^{てまい}小僕・^{わたくし}小僕・^{てまへ}小臣・^{わたくし}小尼」
- ★「奴家」=^{わたくし}「奴家・^{わたし}奴家」
- ★「貧道」=^{わし}「貧道・^{てまい}貧道」
- ★「その他」=^{おやぢ}主個・^{あるじ}主個・^{あなた}主公・^{ばんとう}主管・^{ばんとう}番頭・^{じぶん}自分・^{おいら}自分・^{おのれ}自己・^{おれ}自己・^{おら}自己・^{おの}自己・
^{うぬ}自己・^{ぢぢい}爺々・^{おぢい}老爺・^{ばば}婆々・^{らうば}老婆・^{ばばア}老婆・^{ばば}老婆・^{おやぢ}老爹・^{かみ}お内儀さん・^{おみさま}内儀・^{ほうゆう}朋友・^{ほういう}朋友・
^{ともだち}朋友・^{ほうかん}幫間・^{たいこ}幫間・^{おたいこ}幫間・^{たいこあ}幫間・^{ざうとり}僮奴・^{あれ}僮奴・^{おやぢ}僮奴・^{あくかん}悪漢・^{わるもの}悪漢・^{やつ}悪漢・^{わる}悪漢・^{わひいづつ}悪漢・
^{きやうかん}凶漢・^{わるもの}凶漢・^{わうちやくもの}横着漢・^{いなかも}田舎漢・^{みなか}田舎漢・^{みなかつべい}田舎漢・^{やつ}痴漢・^{たわけ}痴漢・^{ぼか}痴漢・^{たわけ}白痴漢・^{こいつ}此漢・
^{ばくち}博賭漢・^{とんちんかん}頓痴漢・^{ただもの}尋常漢・^{たわけ}呆漢・^{いけるやつ}無頼漢・^{やくざもの}無頼漢・^{あぶれもの}無頼漢・^{ならずもの}無頼漢・^{ずるいやつ}奸猾漢・^{めめしいやつ}女々敷漢・
^{のんごく}泥酔漢・^{よつばらひ}泥酔漢・^{よつばらへ}泥酔漢・^{ごろつき}破落漢・^{ごろんぼ}破落漢・^{かんじや}間者・^{おいらん}花魁・^{かくじ}各自・^{おのおの}各自・^{おのおの}各々・^{むかひ}自個・
^{しうじん}衆人・^{みんな}衆人・^{ひと}衆人・^{やもめ}孀婦・^{しんざん}新參・^{わたくし}吾儕・^{わたし}吾儕・^{わつち}吾儕・^{わたい}吾儕・^{われわれ}吾儕・^{われ}吾儕・^{おれ}吾儕・^{おら}吾儕・
^{ごろつき}破落戸・^{ならずもの}破落戸・^{ひやくせう}僮夫・^{しゆじんこう}主人公・^{つれあひ}伉儷・^{とくい}花主・^{をば}鴛母・^{ふたり}兩個・^{ふたり}二個・^{ひとり}一個・^{おやぢさま}看客。

上の例を見ると、落語だけあって、話し言葉がその読みとしてよく反映されている。つまり、文脈に応じた読みの多様性がみられるのである。「阿父・阿母」のように「阿～」系列の語が多様に用いられているが、尾崎や坪内と同様、その読みや表記は口語的要素のためか実に様々である。この現象は、「阿兄・兄哥・小哥・良人・足下・乃公・小生」にも見ら

れる。登場人物の身分に合わせた表現であるので多様性が見られるのだと思われる。基本的には人称は「我・你・他」であるが、ここでは「小哥・乃公・足下・小可・小生・奴家・貧道」も人称として用いられている。これ以外にも中国俗語関係の語が多数見られるが、特に、マイナスイメージの「～漢」が接尾辞として用いられている例も多い。このように、人称や呼称に関する語も自分の作品に巧く活用していることがわかる。

6. 話題転換語・構造助詞「～地」

話題転換語とは、現在話している内容をやめて次の話に展開することを表す語のことである。中国の俗文学には多くの話題転換語が見られる。中国俗語を集めた唐話辞書である『水滸伝字彙外集』には、「水滸読格」の中に色々の話題転換語がみられる。尾崎は、「不在話下却説・話下不在・話次分頭・閑話休題・話説・却説・案下却説」など比較的多様に用いていた。坪内も、「閑話休題・却説・閑話休題・却説・當下・案下某生再説・案下復説・話頭両分・空話休頭・再説休題・登時」のように、やはり多用していることがわかった。では、円朝の作品にはどのような語が用いられているのかを見てみよう。

却説きてもくろかほこうざう黒川孝蔵よつぼらつは、泥酔をでは居りますれども～(『怪談牡丹灯籠』p.8)1例。『業平文治漂流奇談』1例。『栗田口霽笛竹』1例。『荻の若葉』1例。却説きて『怪談牡丹灯籠』2例。『鏡ヶ池操松影』2例。『業平文治漂流奇談』2例。『真景累が淵』1例。『霧隠伊香保湯煙』3例。『名人長二』3例。却説かへつとく(『菊模様皿山奇談』1例。
登時いまほんがうはるき本郷春木町きぐやいはきちの木具屋岩吉むすめの娘ことしたしで今年あ慥かに十八あで有ります(『菊模様皿山奇談』p.202)1例。
當下それからくづみいふ久津見いふの云いふのには、～(『鏡ヶ池操松影』p.419)1例。お咄替はなしかわつてp.429、1例。

円朝の作品には、「却説・登時・當下」という三つの話題転換語がみられる。「却説」は、近世や近代を通して多用されている語の一つである。「登時・當下」は少々稀な例であるが、尾崎や坪内の作品にも用いられている。話題転換語は、中国俗語を用いているものの種類としては少いことがわかる。但し、「話分両頭」からの影響であると思われる話題転換

の方式がみられる。

さてはなしふたつ わか
 扱話頭両岐に分れまして。塩原角右衛門は～(『塩原多助一代記』p.213)1例。扱て御話は二つに
 わか
 別れましてp.306、1例。

おはなしふたつ わか
 話頭両に分れまして 倉岡元仲の継母と妹の事に移ります(『鏡ヶ池操松影』p.422)1例。

中国俗語の「話分両頭」を読み下した形である。また、これと似た表現も多岐に渡って用いられている。以下は、多様な話題転換の様子を見てみよう。重複しているものは、一つだけを紹介することにする。「説話替て『怪談牡丹灯籠』、話頭別題『怪談牡丹灯籠』、扱おはなしがはつ『塩原多助一代記』、扱お話し二つに分れまして、お話しへ戻りまして、お話し岐つて『英国孝子ジョージスミス之傳』、偕前回申上りました、お話し二派に分れ、偕御断二ツに別れまして、お話し分れまして『後開榛名の梅が香』、扱てお話しは式岐に分れ『松の操美人の生理』、扱お話し変りまして『松の操美人の生理』、又手お話しは二題に分れ『欧州小説黄薔薇』、ここお話しは二頭に分れまして『敵討札所の靈験』、ここお話しふたつ わか
 海土産温泉利書』、お話し二条に分れて『名人競』など、外にも種々の形がある。これらの話題転換は句形式になっているが、基本的には中国俗文学に用いられている「話分両頭」からの派生のものと思われる。円朝の作品には正格の話題転換語の種類は少いものの、中国俗文学の形式を援用しているといえよう。次は、中国俗語の特色の一つである構造助詞「～地」について見てみよう。

ハテ鹹海をせずに滝へ浴ると忽地血を吐て倒れるぞ(『後開榛名の梅が香』p.113)2例。『蝦夷錦古郷の家土産』1例。『敵討札所の靈験』2例。忽地に『真景累が淵』1例。『蝦夷錦古郷の家土産』1例。

サア今に伯母さんが帰つて来れば此事を白地に云つて直ぐに～(『蝦夷錦古郷の家土産』p.407)1例。明々地に『応文一雅伝』1例。明々地に『緑林門松竹』1例。

いま やうす ごしゆ のま しらふ きちがひ
今の様子では御酒も飲ずに白々地の狂人(『敵討札所の靈驗』p.116)1例。

ひよろ とび はた しりもち つ
踉蹌々と躑て撲地と臀餅を搗き、(『怪談牡丹灯籠』p.6)1例。『欧州小説黄薔薇』2例。『栗田口

霑笛竹』1例。『名人競』1例。『奴勝山』1例。撲地と『操競女学校』1例。

みちづれ こへい てもと まつくら とへいこん まあ いや
道連小平の手許へ慕直に飛び込んで参つて嫌といふ(『塩原多助後日譚』p.215)1例。

円朝の作品における構造助詞「～地」と関連した語としては、「忽地・白地・白々地・撲地」が見られる。また、「慕直」もある。構造助詞の場合は、尾崎や坪内とほぼ同様である。ただし、坪内の作品には「立地・乍地」の例も見られる。『俗語解』に「^{テリイ}地 陶冕曰総シテ俗語ニ地ノ字ヲ使フコト底ヨリ^{テリイ}地へ転シ地ヨリ^{テリイ}的へ転シタルモノナリ底地的三字一義ナリト又曰地字付字也何々地ト云コトハ数モ限りモナク有コトナリ廣ク小説ヲシレハ知コトナリ態字ノ下ニ使フ字ナリ」とあるように、典型的な中国俗語であることが分かるだろう。少数ではあるが話題轉換語や構造助詞を用いていることは、中国俗語の影響を意味しているといえよう。

7. 「ほんとう」を表わす「真個」など

「本当」を表わす中国俗語も多様である。「真個」をはじめとして「真成・真誠・真正」が中国の俗文学に用いられている。「真個」などについては、唐話辞書である『雅俗漢語譯解』(明治11年)には、「^{シンセイ}真正 マコトニ ^{ホン}ホンニ ^コ真個 上ニ同 ^{サイ}真材 上ニ同」、『詩語解』には、「真成 真成浪出遊真成薄命 久尋思與ニ今俗語真正一同成或與レ誠通世本古義忠レ君親レ上発レ于ニ真誠」とある。日本の古辞書である『饅頭屋本節用集』に「^{シンドク}真讀 ^{サウ}真相 ^ギ真偽 ^コ真箇 ^{ジツ}眞實」の見出しがあるので、「真個・真実」は中世以後に受入れられたものである。『日本国語大辞典』によれば、「真実」は早い時期に受容されたもので、「ほんとうに」の意味は中世からである。また、『日本国語大辞典』の見出し語として、「真成」は近世、「真誠」は明治期の例が載せられている。尾崎の場合は「^{ほんとう}真箇の・^{いかにも}真箇・^{ほんとう}真箇に・^{まこと}真箇・^{しんこ}真個・^{しんせい}真正の・

まこと しやうじん 眞真のがあり、坪内は眞個に・真個に・真個に・真箇に・真箇に・真成の・
 ほんたう ほん と まこと しんせい ほんたう ほんたう しやうじん ほんほん ほんたう まつとう
 眞成に・眞成に・眞成に・眞正の・眞正に・正眞の・正眞の・正眞の・正眞に・眞當に」
 などを用いていた。全般的に見て、明治期の文学作品には「ほんとう」関係の漢字表記に多
 様性が見られる。勿論「眞実」に多様な訓が施されているものも多い。このことについて
 は、今後、近世・近代の「ほんとう」の漢字表記について述べる際、詳しく検討してみたい。
 円朝の作品にも実に多様な漢字表記が見られるが、まず「眞」とつながる例を見よう。

あ ひと ほんとおぼ ししやうおも 彼^あの仁^{ひと}は眞個^{ほんとおぼ}に師匠^{ししやうおも}思ひでハツハツ～(『荻の若葉』p.68)1例。眞個^{ほんとおぼ}に『離魂病』28例。

『心中時雨傘』2例。眞個^{ほんたう}(の)に『怪談阿三の森』2例。『烈婦お不二』1例。眞個^{ほんたう}に『心中時雨傘』5例。

ちつ ご ぼ やう 些^{ちつ}と御保養^{ごぼやう}をなさいませんと眞成^{ほんたう}に毒^{どく}ですヨ(『怪談牡丹灯籠』p.21)11例。『業平文治漂流奇談』4

例。眞成^{ほんたう}の『名人長二』3例。眞成^{ほんたう}に『蝦夷訛』1例。

ほんたう なまいき 眞當^{ほんたう}に生利^{なまいき}だヨ。(『塩原多助一代記』p.265)1例。眞當^{ほんたう}に『月に謡荻江の一節』1例。

いまこの 助けい ほんたう かたな みる かた 今^{いま}此^{この}お侍^{助けい}も眞正^{ほんたう}に刀剣^{かたな}を鑑定^{みる}お方^{かた}ですから。(『怪談牡丹灯籠』p.5)1例。眞正^{ほんたう}(の)に『雨夜の引窓』
 1例。『八景隅田川』7例。『塩原の怨霊』3例。『後開榛名の梅が香』p.125)5例。『松の操美人の生理』
 7例。『蝦夷錦古郷の家土産』3例。『粟田口霽笛竹』1例。『敵討札所の靈験』3例。『名人競』2例。
 『鶴殺疾庖刀』1例。

そのうへふしづけ し い おめ ほんたう ふし 其上^{そのうへふしづけ}節附^しを為^いたと云^{おめ}ふが和郎^{ほんたう}眞正^{ふし}の節^{ふし}てエものを知^{しつ}て居^あるか(『荻の若葉』p.29)8例。『政談月

の鏡』2例。『鶴殺疾庖刀』1例。眞正^{ほんたう}(の)に『荻の若葉』1例。『月に謡荻江の一節』1例。

れう め ほんたう ながご ほんま 卜^{れう}両^めの眼^めからは眞眞^{ほんたう}の涙^{なご}を翻^ごし、(『鶴殺疾庖刀』p.171)1例。正眞^{ほんま}の『鶴殺疾庖刀』1例。

ほんたう こと いわ 本眞^{ほんたう}の事^{こと}を言^{いわ}ねへから。(『鏡ヶ池操松影』p.520)2例。

け ふ ほんたう あいそ つき こと すげの きま 今日^けは正實^{ほんたう}に愛想^{あいそ}の尽^{つき}る事^{こと}を菅野^{すげ}様^のと～(『月に謡荻江の一節』p.308)1例。『鶴殺疾庖刀』5例。

『緑林門松竹』1例。『八景隅田川』1例。『塩原多助後日譚』7例。『松の操美人の生理』5例。『蝦夷
 錦古郷の家土産』1例。正實^{ほんたう}に『菊模様皿山奇談』1例。

円朝の作品には、眞個^{ほんとおぼ}に・真個^{ほん と}に・眞個^{ほんたう}(の)に・真個^{ほんたう}に・眞成^{ほんたう}(の)に・眞成^{ほんたう}に・眞當^{ほんたう}

に・^{ほんたう}真當に・^{ほんとう}真正(の)に・^{ほんとう}真正(の)に・^{ほんま}正眞の・^{ほんま}正眞の・^{ほんま}本眞の・^{ほんとう}正実に・^{ほんたう}正実に」がある。「真個・真成・真當」は中国俗文学に多用されているが、その他は、『漢語大詞典』の用例を見れば文言的要素を帯びている語である。円朝が、尾崎や逍遙が使っていない「本真」の例を使用したことは特異である。円朝の場合は、外にも「ほんとう」を表わす漢字表記に次のようなものが見られる。

^{なん}何でもお前が^{ほんとう}眞正直に受けるから〜(『蝦夷錦古郷の家土産』p.411)1例。

^そ夫れなれば^{ほんたう}正直に申上げますが、(『菊模様皿山奇談』p.130)1例。『名人競』1例。

^{ほんま}正銘にピシヤピシヤ思ひ切つて毆打たが、(『松の操美人の生理』p.307)1例。

^{このくれ}此暮は^{ほんとう}眞統に困りますヨ(『松と藤芸妓の替紋』p.349)1例。

^{またかや}又茅場町か^{どこ}何処かへ^{げいしや}芸妓に出てみたとも云ふが^{ほんたう}實説か〜(『欧州小説黄薔薇』p.17)2例。

^{ほんたう}實説(の)『怪談乳房榎』3例。『敵討霞初嶋』2例。實説で『栗田口霽笛竹』1例。

「^{ほんとう}真正直に・^{ほんたう}正直に・^{ほんま}正銘に・^{ほんとう}眞統に・^{ほんたう}實説」は、尾崎や逍遙の作品には見られないものである。「真正直・正直」は、日本語の文章に合わせた日本的な訓である。「正銘・眞統・実説」は『漢語大詞典』に登録されていない語である。「真実」は中国で文言や口語として用いられるが、日本の近世や近代の文学作品にも多用されているし、現代にも引き継がれたものである。この語もやはり円朝の多くの作品に用いられている。どのように読まれていたかを提示すると、「^{ほんたう}真実(の)に^{ほんたう}真実(の)に・^{ほんま}真実に・^{ほんま}真実に・^{ほんま}真実の・^{ほんま}真実・^{ほんま}真実に」のように、音読みと訓読みが混在している。「真実」を誤記したような^{ほんたう}直実(『塩原多助一代記』)の例もある。案外、明治10年代までは「ほんとう」の漢字表記である^{ほんたう}本当は少い。同音の^{ほんたう}本統も見られるが、円朝の作品から見れば初期作品に「本統」が多く、後期に行くほど「本当」が増えている。外にも、「^{まこと}寔に・^{まこと}誠に・^{まこと}実に・^{まこと}寔に・^{まこと}真に・^{まこと}洵に」があり、稀に^{まこと}赤誠(『離魂病』)もあった。「ほんとう」を表わす漢字表記には、中国俗文学で用いられている語や文言の語を活用しているし、日本で作られた「本当・本統」も少数であるが適

宜用いられていて、「ほんとう」を表わす漢字表記は実に多いことがわかる。

8. 一伍一什・比況の「～と一般」

中国俗文学では、「いちぶしじゅう」に該当する語として「一五一十」が基本として用いられ、「有枝有葉」も用いられている。唐話辞書には、「一五一十 一部始終(『俗語解』未詳)・^{イチゴ イチジフ}一五一十 イチブシジウ (市川清流『雅俗漢語譯解』明治11年)・^{イクシイウ ヨウテキサイセツ}有枝有葉的細説 イチブシジウクハシクハナス (桑野銳『小説字林』明治17年)のような例が見られる。「一五一十」は、近世の諸文献や明治初期の文学作品、漢語辞書にも登録されている。また、「一五一十」から変形した種々の漢字表記が見られる。例えば「^{いちぶしじう}一伍一什・^{いちぶしじう}一十五十・^{いちぶしじう}一伍四什・^{いちぶしじう}一十五十・^{いちぶしじう}一十五十什・^{ぶしじう}一仔細什・^{いちぶしじふ}一伍始終・^{しじふ}一十・^{ぶしじう}一分仔什」のようなものがある。これらの漢字表記は、中国では用いられていない日本式に変形したもので、特に明治期の作品に見られる¹⁶⁾。坪内や尾崎の作品にも「一五一十・一伍一什」が少々用いられているし、他の語も見られる。円朝の場合はどうだろうか。

ハア^{ねこそげしつ}一伍一什知てるだア(『名人長二』p.421)1例。

^{いひまけ}飯嶋家にては^{ちうぎ}忠義の^{こうすけ}孝助がお^{くに}國と^{げんじらう}源次郎の^{わるだくみ}奸策の^{いちぶしじふ}一伍一什を^{たちきいた}窃聞致しまして(『怪談牡丹灯籠』p.36)3例。

『欧州小説黄薔薇』1例。『鏡ヶ池操松影』1例。『鶴殺疾庖刀』2例。『栗田口霏笛竹』3例。『霧隠伊香保湯煙』1例。『八景隅田川』1例。『名人長二』2例。『蝦夷訛』7例。『闇夜の梅』1例。『塩原多助後日譚』1例。『烈婦お不二』1例。『欧州小説黄薔薇』1例。

^{てだい}手代の^{やすべゑ}安兵衛が^{かけつ}潮付けて^{まみ}参り^{しじふ}一什の話を聞いて^{はなし}愈々^き驚き(『蝦夷訛』p.138)1例。

「一五一十」の例はなく、「^{ねこそげ}一伍一什・^{いちぶしじふ}一伍一什・^{しじふ}一什」の例が見られる。普通用いられている「一部始終」はない。「一什」は、「一十」の異形で「一伍一什」の縮約したものといえる

16) 羅工洙(2004)「近世・近代における『一五一十・一伍一什』」『国語学研究』第43集、東北大学国語学研究会、pp.25-35

が、ともあれ、中国俗語の影響を受けていたことがわかる。この外に、尾崎や坪内の作品にも見られた「動詞重ね型・比況を表わす～『と一般』」の例もある。

めいげつ かうかう きい いたづ しつない ざ ばん
明月の皎々たるを聞て徒らに室内に座すると一般なれば(『欧州小説黄薔薇』p.50)1例。

ちよつとすわ み ひ まわ まわ
鳥渡坐つて見なよ。一と廻り廻りなよ。(『塩原多助一代記』p.229)1例。『栗田口露笛竹』2例。

『火中の蓮華』1例

あ であますと、脂を管めた蛇のやうに～(『後の業平文治』p.47)1例。

上の例が円朝の全例であり、あまり用いられてはいないが、中国俗語の痕跡は残っている。比況の「～と一般」は「如し・様だ」と同義で用いられていて、動詞重ね型は「廻一廻・當一當」を読み下した形で用いられている。

9. その他

以上、先行研究と比較した上で、中国俗語の使用が多いと思われるものを主として考察した。外にも多くの語があるが、紙幅の関係上、1例ずつ紹介しておくことにする。ただし、調査の対象が多いため、異なり語のみを提示したい。また、語は一つであっても読みが多様であるので、その読みを全部提示したい。作品や例数は省略する。

ひつじやう ひつぜう ひつでう てつきり てつき どうせ きりやう きれう きれう きりよう きれう きれう せつわ
必定、必定、必定、必定、必定り、必定、嫵致、嫵致、嫵緻、標致、標致、標緻、説話、
おはなし わせつ たね はなし さだめ もし よささう ひよろ れうけん ささやく ささや ささやき ひそひそ
説話、話説、話柄、話柄、必然、倘、應良、踰跟、了簡、私語、私語く、私語、私語、
みみこすり さうばん いっか いま いっしか つうぜう たいがい あたりまへ ただ なみ つね せいけい くらし
私語、早晚、早晚、早晚、早晚、通常、通常、通常、通常、通常、通常、生計、生計、
もと たつき くわつせい や くらし くらす たつき ふだん いっも いっつ へいぜう ふだん
生計、生計、活計、活計る、活計、活計す、活計、平日、平日、平日、平常、平常、
つねに いっも ただ へいぜい いっも よく へいぜい ふだん いっも つね ただ へいそ ふだん
平常、平常、平常、平常、平常も、平常、平生、平生、平生、平生、平生、平素、平素、
いっも いっも ひごろう つね つねづね しばらく しばらく ひきぶり ひきしう みみたば つれ ちかづき とりま
平素、平素も、平素、平素、平素、久闊く、久闊、久闊、久闊、耳朶、同伴、近昵、幫助
き、いっこう いちどう みな いちだん てん いちじ あるひ み しさい わけ しさい しぼし
き、一向、一同、一同、一団、一点、一時、一日、一味、仔細、仔細、子細、造次、

びつくり をどる 喫驚、喫驚く、たぢげたの 喫驚、たまげ 喫驚る、びつくり 吃驚、かぜ 感冒、かぜをひく 感冒、じぶん 時分、とき 時分、れいり 伶俐、りこう 伶俐、おぜへ 伶俐、
はたらき 伶俐、かしこ 伶俐い、まんいつ 万一、まん 万一、もしも 万一、ひよつと 万一、もし 十分、ぶん 十分、じうぶん 十分、いつぱい 十二分、あたたま 天窓、
つわり 天窓、かつさい 喝采、ちくでん 逐電、ちくてん 逐電、かけおち 逐電、おツぱし 逐電る、いなくな 逐電る、ツぱし 逐電る、しへん 四辺、あたり 四辺、ほう 四方、しほふ 四方、
あたり 四方、どちら 四方、よも 四方、あたり 四隣、ひとめ 四隣、あたり 四傍、あたり 四面、あたり 四院、ようい 近傍、ようあ 容易に、たやす 容易、かるがる 容易、
やすらか と、たやすい 容易に、おつくう 容易、なかなか 不容易、としころ 不容易な、そのころ 歳比、このころ 其比、ひごろ 此比、ひごろ 日比、しつかい 昼比、すつかり 悉皆、すつかり 悉皆、
みんな 悉皆、みな 悉皆、そつかり 悉皆り、そつかり 悉皆、まるで 悉皆、まるツかり 悉皆、すつぱ 悉皆り、きつぱり 悉皆、のこらず 悉皆、ことごとく 悉皆、きせう 些少、
きつぱり 些少、ちいさい 些少、いきさか 些少、ちつと 些少、ちつと 些少、きさい 些少、すくない 些少、けち 些少、わづか 些少、ぶんべつ 分別、わけまへ 分別、あいにく 生憎、かつこう 恰好、
おりにく 恰好、てうど 恰好、いい 恰好、ぐわんらい 原来、もともと 原来、もとより 原来、もと 原来、ぐわんらい 原来、もともと 原来、もとより 原来、もと 原来、はしがき 端書、とうこん 当今、
とうこん 当今、たいいま 当今、とうぶん 当分、とうじ 当時、そのころ 当時、たたいま 当時、そのとき 当時、いま 当時、とぎまぎ 周章狼狽、らうげい 狼狽周章、あわて 周章る、とつち 周章、
あわだた た、らうげい 周章しい、あわて 狼狽、うろたへ 狼狽、ほうほう 狼狽、まごまご 狼狽、うろたへ 狼狽、ききあ 耳語く、みみすり 耳語、みみうち 耳語、ほんもう 本望、
じゆうじ 自由自在、きかず 不自在、ふじゆう 不自由、きかない 不自由、じゆう 自由、ひたすら 只管、ただ 只管、ようぼう 容貌、やうぼう 容貌、みめ 容貌、かたち 容貌、
みめかたち 容貌、かほ 容貌、かほつき 容貌、かほつき 容貌、きれう 容貌、きれう 容貌、まりやう 容貌、かつこう 容貌、そつぱ 容貌、こがら 容貌、ようす 容貌、なりかたち 容貌、なりかたち 容貌、もんな 容貌、
をなご 容貌、なり 容貌、きれう 容姿、きれう 容姿、すがた 容姿、かたち 容姿、なりふり 容姿、かたち 容姿、すがた 容止、まめめか 容止、のみま 老実、まじめ 老実、もつとも 老実ら、
としごろ しい、やうす 年紀、とし 年紀、ひつきやう 必竟、ひつけう 必竟、ひつけう 畢竟、ひつきやう 畢竟、つまり 理由、りゆう 理由、わけ 理由、いりわけ 理由、よし 理由、
いつぞや 日外、いつか 日外、こうご 向後、きやうご 向後、かうご 向後、きやうより 向後、きやうかう 向後、けうこう 向後、これから 向後、けうこう 向後、きやうから 向後、はふべん 方便、あ 面会、
めんかい 面会、あ 面会ふ、あ 面会せる、かほあは 面会せる、どうか 所願、どうぞ 所願、のぞみ 所望、のぞむ 所望む、わか 了解る、わかり 了解、これから 爾後、
このご 爾後、ていとう 抵当、ていとう 抵当、かた 抵当、たうてい 到底、つまり 到底、とても 到底、どうせ 到底、どうで 到底、あいにく 生憎、あいに 生憎く、あやにく 生憎、にうやう 入用、
いりやう 入用、ざんじ 暫時、しばらく 暫時、すぐ 暫時、すこし 暫時、ちぎ 暫時、まじくひま 暫時、しばし 須臾、ちつと 須臾も、いはゆる 所謂、うちむ 裏面、じんじやう 尋常、じんじやう 尋常、
たいがい 尋常、ただ 尋常、なみ 尋常、よつね 尋常、じんじやう 尋常一様、やう 普通、ふつう 普通、なみ 普通、なみなみ 普通、あたりまへ 普通、けいさやう 景況、ありさま 景況、けしき 風光、
ふうけい 風景、かつさい 喝采、けうじつ 頃日、このころ 頃日、いんしん 音信、おとづれ 音信、おときた 音信、しくみ 脚色、こごち 脚色、ねがひ 情願、ねだり 情願、ねだ 情願る、どうか 情願、
うなづ 點頭く、うなづき 點頭、とりわけ 就中、なかんづ 就中、わざ 故意と、あざわら 冷笑ふ、けなす 冷笑、にや 冷笑と、ひや 冷笑す、はらのうら 肚裏、いけまじ 不能得ぬ、
いさい エ、いさい 委細、くわくし 委細、いぼが 委細、ねつたう 熱鬧、それに 加之、そのうへ 加之、おまけ 加之、ほうこん 方今、ほうこん 方今、うでめへ 本事、なすこと 生業、
せいわつ 生活、もち 管轄、めぐりあ 邂逅ふ、あ 邂逅ふ、あふ 邂逅、どうはん 同伴、つれ 同伴、いつしよ 同伴に、つれ 同伴る、つきや 同伴る、いんしん 音信、

たより おとづれ おとない たうじ げんこん いま ただいま ほんしん いっしょ しゆい しゆやう いひは だいこん
 音信、音信、音信、現今、現今、現今、現今、本心、同道、主意、主張、主張、蘿蔔、
 おんじん まさ これ たちどま たつて たたず た たつ たちどま おいねエ いや
 胡蘿蔔、正に是、立停る、佇立る、佇立む、佇立つ、佇立、佇立る、不好ねエ、不好、
 いらない いらん いやだ いひつけ いひつけ あかさま すんし しるし ころざし ぶんぐい ばん びんぎ
 不要い、不要、不享、吩咐る、吩咐て、明白、寸志、寸志、寸志、分外、麵包、便宜、
 とるべ たより ほうべん じかう じこう じぶん たうぶん しゆだん てだて てんとう しうぎ はな せうらい
 便宜、便宜、方便、時候、時候、時候、当分、手段、手段、纏頭、纏頭、纏頭、生来、
 うまれつき ようい したく たくみ もくろ ちくてん きうだん ところ ようす うろん うきん しやうく しぼし
 生来、準備、準備、計較、計較む、逐天、商議、土地、動靜、胡乱、胡乱、生得、霎時、
 すこし しぼらく や や なかば なほざり つらげへ しやべ なの よもや よも かりそめ いやしく
 少時、少時、少時、中流、等閑、面貌、告訴る、自首る、豈夫、豈夫、苟且、苟且にも、
 あかし とりな ねんらい すつかり つきあたり はづれ なり こしらへ ふすま からかみ わか わかれ
 自白、取做す、年来、尽底、尽頭り、尽頭、行装、行装、紙門、紙門、理會る、分派、
 くす つらい もくか いま もくか たうじ ただいま もつとも なつたいま すぐ なか わけ どうか
 老相む、辛苦、目下、目下、目下、目下、目下、至当、即刻、即刻、情交、情交、切望、
 どうぞ けしき きさま ありさま やうす けんぞく きすが けどら いひわけ いひわけ わざ いでぢら
 切望、光景、光景、光景、光景、眷属、了得、了得れない、分疏、分疏、伎倆、打扮、
 なり こしらへ どうか さかな おかず ちようど かどで なかま ひごろ ほんらい みみたぶ みみたぼ すしけり
 打扮、打扮る、万望、下物、下物、恰是、首途、同僚、日来、本来、耳朵、耳朵、少許、
 あはて もてなし もてな うつかり わい はなし りくわい かたち まま あはて たまたま
 倉皇る。款待、款待す、放心、哩、告知、理會、容態、遮莫、慌忙る、適々。

このように、円朝の作品には種々の中国俗語が用いられている。語によっては、文言と口語両用の語もある。また、「^{ようぼう}容貌、^{やうぼう}容貌、^{みめ}容貌、^{かたち}容貌、^{みめかたち}容貌、^{かほ}容貌、^{かほつき}容貌、^{かほかたち}容貌、^{きれう}容貌、^{きりやう}容貌、^{かつこう}容貌、^{そつぽ}容貌、^{こがら}容貌、^{ようす}容貌、^{なりかたち}容貌、^{なりかたう}容貌、^{をんな}容貌、^{をなご}容貌、^{なり}容貌」のように、音読みと訓読みのどちらもある例も見られる。特に、前にも考察しているように、文脈に合わせた日本語の訓を豊富に付けていることが特徴である。さらに、仮名遣いの表記による違いも提示したが、意味には関係していない。ここでは提示していないが、「^{おかし}可笑・^{わりい}可厭」のような「可～」の形容詞的な語、「^{きんす}金子・^{せんす}扇子」のような接尾辞「～子」の語、「^{うちわ}打割る・^{うちわす}打忘れる」のような「打～」の接頭辞の語もかなり多い。

10. おわりに

今回は、明治初・中盤に活躍した三遊亭円朝の作品を通して、中国俗語の使用実態を把握した。普通なら、特に講談であるので、文字起しをする時に平易な漢字遣いをして、読みやすい漢字を使うべきである。しかし、円朝の文章には、当時の読者には少々難解な中国俗語がかなり多用されていたことがわかった。問題は、誰が主導的に漢字使用を進めたかが分からないことである。円朝、速記者、出版社が絡んでいることは確かである。

比較的多用される典型的な中国俗語を調査した結果は次の通りである。まず、「章回小説」をまねた形の体裁があることが特色といえよう。これは中国俗文学で多く用いられている形式であるが、さらに「回目」として漢詩めいた句を付け加える形が援用されている。また、「結びの常套句」も「章回小説」の特徴であるが、円朝の作品においても完璧な形ではないものの、「次回」などの語を用いて話の続きがあることを明示している。指示代名詞は、「那邊」が多用されている。全般的に「這」系列の語はあまりなく、「那」系列の語が多用されているが、尾崎や坪内に比べると種類は多くない。人称を表す語には「儂・渠」があり、稀な例も見られるがさほど多くはなく、呼称は非常に多いことがわかる。特に「阿～」系列の語が多く、「阿母」の場合は種々の和訓を付けている。話題転換語は「却説・登時・當下」が稀に用いられ、「話分両頭」から来たと思われる様々な形が用いられている。「忽地」のような構造助詞「～地」があるが、他の作品にも一般的に見られる。「ほんとう」を表わす「真個・真成・真正」のような語は「ほんとう」系の宝庫ともいえるべきで、実に多様な語が用いられている。中国の文献にもないものもあるので、「ほんとう」の漢字表記を巡る資料として価値があると思われる。「一部始終」にあたる「一伍一什」は、元来「一五一十」から来た変形した語である。動詞重ね型は円朝の作品にはなく、その読み下した形の痕跡が見られる。この外にも、作品のあちこちに中国俗語の多様な漢字表記があることも確認した。

このように、落語であるにも関わらず、中国俗文学の体裁や俗語を援用している。『怪談牡丹灯籠』は、中国の『剪灯新話』にある『牡丹灯記』を翻案したものであるから、円朝自身も中国俗文学に関心があったといえよう。しかし、落語を文字起ししたものに、わざわざ中国俗語を積極的に受入れる必要があったのであろうか。一般読者にとって易しい漢字表記をして読ませることが大事であるにもかかわらず、わざわざ難解の漢字表記をしたことは、それだけ唐話学の影響があったことを物語っている。また、漢字表記が多様化したことによって、文の飾り的な役割もしていたと思われる。

【参考文献】

- 輿水優(1985)『中国語の語法の話—中国語文法概論』光生館、p.219
進藤咲子(1982)「三遊亭円朝の語彙—『怪談牡丹灯籠』」『講座日本語の語彙』明治書院、p.127
山本政秀(1993)「速記出版物の言文一致促進」『近代文体発生の史的研究』岩波書店、pp.367-368
清水康行(1988)「『牡丹灯籠』の漢字」『漢字講座9近代文学と漢字』明治書院、p.76
川田順造(2013)「ハナシと文字のあいだ」『円朝全集』第2巻の月報2、p.3
大木康(2009)「馮夢竜『三言』から上田秋声『雨月物語』へ—語り物と読み物をめぐって」『文学』第10巻1号、岩波書店、pp.151-156
『日本人名大事典』(1990)、平凡社、p.208
羅工洙(2004)「近世・近代における『一五一十・一五一什』」『国語学研究』第43集、東北大学国語学研究会、pp.25-35
_____(2010)「近世・近代における中国俗文学的形式の受容」『日本研究』第14集、高麗大学校日本研究センター、pp.153-180
_____(2017)「近世・近代における『阿〜』系列の中国の呼称について」『日本近代学研究』第55輯、韓国日本近代学会、pp.7-37
_____(2018)「近世・近代における中国語の接尾辞『〜家』の受容と意味用法」『日本近代学研究』第59輯、韓国日本近代学会、pp.7-41
_____(2019)「尾崎紅葉の中国俗語趣味」『東北亜文化研究』第60集、東北亜細亜文化学会、pp.235-259
_____(2020)「坪内逍遙の中国俗語趣味」『日本近代学研究』第69集、韓国日本近代学会、pp.27-56

논문투고일 : 2021년 09월 14일
심사개시일 : 2021년 10월 18일
1차 수정일 : 2021년 11월 08일
2차 수정일 : 2021년 11월 16일
게재확정일 : 2021년 11월 20일

 <要旨>

三遊亭円朝の中国俗語趣味

羅工洙

明治初・中盤に活躍した三遊亭円朝の作品を通して、中国俗語の使用実態を把握した。比較的多用される典型的な中国俗語を調査した結果は次の通りである。まず、「章回小説」をまねた形の体裁があることが特色といえよう。指示代名詞は、「那邊」が多用されている。全般的に「這」系列の語はあまりない。人称を表す語には「儂・渠」があり、稀な例も見られるがさほど多くはなく、呼称は非常に多いことがわかる。話題転換語は「却説・登時・當下」が稀に用いられ、「話分両頭」から来たと思われる様々な形が用いられている。「忽地」のような構造助詞「～地」があるが、他の作品にも一般的に見られる。「ほんとう」を表わす「真個・真成・真正」のような語は「ほんとう」系の宝庫ともいべきで、が実に多様な語が用いられている。「一部始終」にあたる「一伍一什」は、元来「一五一十」から来た変形した語である。動詞重ね型は円朝の作品にはなく、その読み下した形の痕跡が見られる。この外にも、作品のあちこちに中国俗語の多様な漢字表記があることも確認した。

このように、一般読者にとって易しい漢字表記をして読ませることが大事であるにもかかわらず、わざわざ難解の漢字表記をしたことは、それだけ唐話学の影響があったことを物語っている。また、漢字表記が多様化したことによつて、文の飾り的な役割もしていたと思われる。

Chinese Slang Hobbies of Sanyutei-Encho

Na, Gong-Su

This time, he grasped the actual use of Chinese slang through the works of Sanyutei-Encho, who was active in the early and mid-Meiji periods.

First of all, there is the appearance of imitating “章回小説”. In addition, the “conclusion idiom” is also a feature of the “章回小説”. As a demonstrative pronoun, “Nahen” is often used. Generally “這” series of the word is not much, the term “那” series has been widely used. The word that expresses the person is “儂・渠”. It contains very many words of designations. As a topic conversion word, “却説・登時・當下” is rarely used. There is a structural particle “～地” like “忽地”. A wide variety of words are used, such as “真個・真成・真正” which stands for “ほんとう”. “一伍一什”, which corresponds to “一部始終” is a modified word that originally came from “一五一十”. In addition to this, I also confirmed that there are various kanji notations in Chinese slang around the work.

Although it is important for general readers to use easy kanji notation for reading, I purposely used difficult kanji notation. It shows that it was influenced by “唐話学” (Chinese Study). In addition, due to the diversification of kanji notation, it seems that it also played a decorative role in sentences.